

# 中神田遺跡発掘調査概要・II

—寝屋川御幸西住宅第3期工事に伴う発掘調査—

2000・3

大阪府教育委員会



## はしがき

中神田遺跡は、寝屋川御幸西住宅の建設に先立つ調査で発見された遺跡です。

1次・2次調査は、寝屋川市教育委員会によって実施されました。その調査地は、今回の調査地の北側にあたり、堀によって区画された屋敷地や、羽釜を井戸枠として転用した井戸、耕作地などが発見されています。これらは鎌倉時代を主体とする遺構群で、その下からは堤状の遺構が発見されました。この堤状の遺構は、明確な遺物が伴っておらず、時期などは不明です。しかしながら、南方には府指定史跡伝茨田堤があることなどから、大変注目を要する遺構です。

今回の調査では、集落を分断あるいは襲った鎌倉時代や古墳時代の自然流路等が検出され、当時の過酷な集落環境が明らかとなりました。

今回の調査が文化財に対する理解と認識を深める一助となり、地域の歴史を探求する資料として広く活用されることを望みます。

最後になりましたが、大阪府建築都市部、寝屋川市教育委員会をはじめとする関係機関、関係各位に心から感謝いたします。

今後とも、文化財の保護に対して深いご支援・ご協力を願い申し上げます。

平成12年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 小林 栄

## 例　　言

1. 本書は寝屋川御幸西町所在、大阪府営御幸西第3期住宅（建て替え）建設工事に先だって実施された、中神田遺跡発掘調査の概要報告書である。
2. 調査は、大阪府教育委員会文化財保護課が大阪府建築都市部より依頼を受け、技師 横田明が現地調査を担当した。
3. 現地調査は平成12年1月7日から3月24日まで実施し、並行して遺物整理も実施した。
4. 標高の表記については従来の文化財調査との関係から、T.P.を基準として表記した。
5. 航空測量については、株式会社フジコーに写真撮影、図化までを委託した。
6. 本書の執筆、編集は横田明が行った。

## 目 次

第1章 調査に到る経過	1
第2章 位置と環境	3
第3章 調査の成果	5
第4章 まとめ	11
報告書抄録	12

## 挿図目次

第1図 中神田遺跡の位置	1
第2図 調査区配図	2
第3図 中神田遺跡と周辺の遺跡	4
第4図 地区割図	5
第5図 自然流路NR-09上層断面図	6
第6図 遺構配置図、土層断面図	7~8
第7図 中世遺構、包含層出土遺物実測図	9
第8図 下層自然流路検出面平面図	10
第9図 下層流路NR-10土層断面図	10
第10図 下層遺構、包含層出土遺物実測図	11

## 図版目次

図版 1 中世相当面西半部（西から）

中世相当面東半部（西から）

図版 2 中世自然流路 N R -09

中世自然流路 N R -09断面

図版 3 調査区北壁土層断面

中世遺物出土状況

図版 4 下層自然流路 N R -10

下層自然流路 N R -10断面

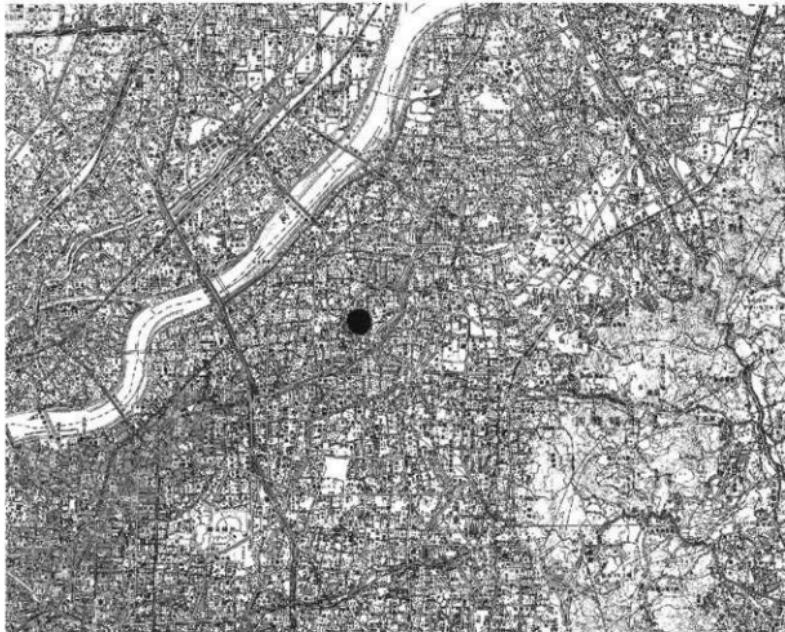
## 第1章 調査に到る経過

大阪府建築都市部では、近年来、府下各地の府営住宅の老朽化による立て替え工事を随時実施している。寝屋川市御幸西町に所在する御幸西住宅は、昭和35年に建設された木造および簡易耐火構造の住宅であった。しかしながら、建築後相当年数が経過したことで、老朽化、狭小という問題が発生した。

住宅の高層化に伴う第1期の建設工事が具体化するにおよび、事前に埋蔵文化財包蔵地の有無を確認するための調査を実施した。確認調査の結果、御幸西町を中心とする一帯に鎌倉時代を中心とする遺跡が存在することが判明した。協議の結果、発掘調査が必要との結論に達し、第1期工事、第2期工事に伴う発掘調査が、寝屋川市教育委員会によって実施された。

今回は府営御幸西住宅第3期建設工事に当たる。平成10年度に試掘調査を実施したところ古墳時代、鎌倉時代の遺物が発見されたので、今回の発掘調査の実施となった。

また府営住宅以外では、平成9年度に御幸西調節池の築造に先立つ事前調査が、大阪府教育委員会によって実施されている。



第1図 中神田遺跡の位置（縮尺10万分の1）

既往の調査については下記のとおりである。第1次調査は御幸西住宅第1期工事に伴うもので、平成5年度に寝屋川市教育委員会によって実施されている。幅6mの堀によって区画された屋敷地跡、幅4mの溝、井戸、土坑、柱穴などが発見された。井戸の内1基は羽釜を6段積み重ねて井戸枠にしたものであった。遺物は瓦器椀、皿、羽釜、白磁、青磁、石鍋、温石、砥石、曲げ物、草履など多様な遺物が出土しており、13世紀末から14世紀初頭を主体とする集落の一部である。

第2次調査は御幸西住宅第2期工事に伴うもので、平成8年度に寝屋川市教育委員会によって実施されている。鎌倉時代については遺構が極めて少なかった。調査区の南側で井戸が5基検出されたのみで、それ以外には頗著な遺構は確認されていない。水田として利用されていたようである。鎌倉時代の遺構面の下からは堤状遺構が発見されている。この堤状遺構は時期は不明であるが、東側には数次にわたる洪水の所産と思われる砂層が堆積していた。

第3次調査は御幸西調節池築造に伴うもので、平成9年度に大阪府教育委員会によって実施されている。時期不明の溝や土坑、畦畔がいくつか検出されたのみで、時期も不明である。耕作地であろうか。



第2図 調査区配置図

## 第2章 位置と環境

中神田遺跡は寝屋川市御幸西町周辺に位置している。寝屋川市西部は寝屋川と古川の2本の河川が流れしており、かつては、河川の自然堤防上に農村地帯が展開した。中神田遺跡は古川左岸の自然堤防上に位置している。標高はT.P.+3m、北側に高柳遺跡、東側に神田東後遺跡、南側に宮野遺跡がある。このあたりは水はけが悪く低湿で、過去の時代においても治水は大変大きな課題であった。調査区の南方約1km、京阪電車大和田駅の北方には伝茨田堤（門真市宮野町）がある。『日本書紀』の仁徳天皇の条にその名前が登場し、淀川左岸の開発史の定点とされる遺跡である。しかしながら、実際にこの遺構が5世紀にまで遡りうるかどうかは全く確証がない。では考古学的に見た場合、淀川左岸低地地域の開発はどのようにであったのだろうか。

かつて一帯には、広大な湖や湿地帯が広がっており、その縁辺の微高地に遺跡が築かれた。縄文時代では、守口市の讚良川遺跡で前期の遺物が確認されており後期初頭まで継続する。特に中期の遺物に恵まれている。讚良川遺跡の西にある四条畷市砂遺跡では中期前半の遺物を出土し、門真市西三花遺跡、守口市八雲東遺跡では縄文時代後期前半の遺物が確認されている。また、寝屋川市長保寺遺跡では突帯文を主体とする晚期後半の土器を出土する。

弥生時代になると、前期の遺跡は四条畷市雁屋遺跡、大東市中垣内遺跡、門真市普賢寺遺跡などがある。中期の遺跡として、四条畷市雁屋遺跡では、多くの方形周溝墓や鳥形木製品、銅鐸の石製舌なども確認されている。玉造工房の確認された守口市八雲遺跡は、淀川の三角州上に形成された遺跡である。後期の遺跡としては、門真市大和田遺跡で、3点の銅鐸が出土している。

古墳時代以降には、周辺の排水が進行したようである。人々は砂州上や自然堤防上などの微高地上に活動の痕跡を残し、積極的にこの地の開発を進めた。古墳時代以降、遺跡数は増加する。前期の集落として、寝屋川市長保寺遺跡、讚良郡条里遺跡では庄内期の土器、讚良川遺跡では布留式期の土器が出土している。中期になると寝屋川市内の楠遺跡がある。掘立柱建物や井戸、土坑、溝等が検出され、調査区南端土坑からは韓式土器が多数発見されている。また長保寺遺跡で竪穴住居以外に、井戸枠に転用された船材が発見されている。後期では、楠遺跡や長保寺遺跡、池田西遺跡、讚良郡条里遺跡などが中期から継続する。

飛鳥・奈良時代では、寝屋川市長柴寺町において奈良時代瓦の散布が確認、高柳廃寺と命名されている。古代茨田郡の中心でもあり「茨田寺」に比定する意見もある。また高柳廃寺の側には切石基壇を伴う墳墓がある。「茨田親王塚」の伝承があり、凝灰岩製の骨蔵器が発見されている。

平安時代には寝屋川市内では高柳遺跡や神田東後遺跡などで遺構や遺物が確認されている。高柳遺跡では、河川の西側の微高地上に集落が形成された。集落は落ち込みを境に南北にわかれており、北地区では4棟の掘立柱建物、南地区では7棟以上の掘立柱建物が検出。これらは9~10、12世紀の遺構が主体であった。中国白磁、綠釉陶器なども一定量出土しており、一般集落とは異なる様相であった。また11世紀には埋没したと考えられる古川の旧流路が検出された。神田東後遺

跡は中神田遺跡の東側にあたり、平安時代中期の集落が確認されている。井戸からは墨書銘黒色土器が出土している。時期的には高柳遺跡に遅れて成立したものである。

さらに鎌倉時代になると大東市北新町遺跡、門真市普賢寺遺跡、寝屋川市長保寺遺跡、中神田遺跡などで遺構、遺物が発見されている。特に長保寺遺跡、中神田遺跡では濠に囲まれた屋敷地が確認されており、この地域の開発の拠点であったようだ。

これら平安時代～中世の遺跡群はほとんどが河川の自然堤防上に形成された集落である。低湿地を積極的に開墾し、田畠につくりかえていった様子がしのばれる。

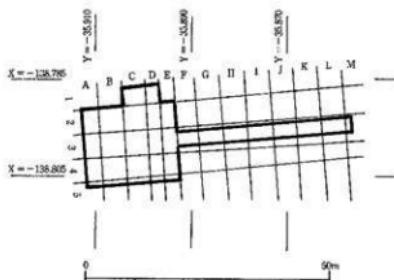


第3図 中神田遺跡と周辺の遺跡 (S : 1 : 20,000)

### 第3章 調査の成果

#### 調査の方法

現代の盛り土などは機械で除去し、包含層以下については一層一層人力で掘削し、遺構面精査、遺構検出、遺構掘削、遺物の取り上げに努めた。遺物取り上げの地区割りについては、調査区の形状に合わせて、基本的には5mを単位として区切った。東西方向は東からA B C D、南北方向は北から1 2 3とし、A-1区、B-2区などと呼称した。



第4図 地区割図

#### 基本層序

粘土やシルト層を基本とし、間に砂を含んでいる。12層の灰黒色粘土層より上は安定した環境を思わせるが、13層の黒色粘土層より下層は、湿地帯で形成されたことを推測される状況だ。以前は湿地帯であったものが、中世以降比較的安定した環境になったことを思わせる。

1層の盛り土は近年の宅地造成時の盛り土である。調査区西部では20cm程度であるが、東部では1m近くにおよぶ所もある。地表面はおよそT.P.+2、3mで平均している。

2層の黒色土層は宅地造成以前の耕作上である。部分的にしか残っていないが、約20cm程度である。また調査区西端では2層を切り込むように大きな落ち込みがみられる。近代以降の瓦や木片などが多量にふくまれている。検出面から2m近くまでおよぶ。

4層の灰褐色土層、5層の灰茶色砂質上層、6層の灰茶色土層はそれぞれ層厚10~20cmで、近世の染め付けを含んでいる。トレチ部分では、11層を基盤に5層、6層主体の落ち込みや溝状の堆積がみられる。近世時期の耕作の痕跡のようだ。

7層の茶灰色砂層、8層の茶灰色砂質土層、9層の褐色砂は中世の遺物包含層である。トレチでは部分的にしか残っていない。瓦器や土師質羽釜を主体にしながら中国製青磁なども含んでいる。時期的には13世紀が主体である。酸化鉄の沈着がみられる。中世の耕作土と推定される。

10層の暗灰色粘土層は中世耕作面の基盤となる層位である。上面はT.P.+2、3mを前後する。上面に酸化鉄の付着が多量にみられる。しかしこの層位からは時期不明の土師質土器の細片が若干出土したのみである。

12層の灰黒色粘土は層厚20~30cmである。粘っこい粘土層で、無遺物層である。

13層の黒色腐植土層は泥炭化したような植物質を多く含む層である。層厚数cm程度の薄い層であるが、12層と14層との間にはさまれるようにして調査区全域に広がっている。湿地に生える草木類がこのようになったのであろう。

14層は黒灰色粘土層で、これも調査区を通して水平に堆積している。しかしながら、調査区中央部では若干盛り上がっており、両側が低くなっている。河川や湿地との境にあたる部分なのであろうか。

15層の黒色粘土層は数cm程度の薄い堆積層である。細片ばかりながら、古墳時代須恵器を含んでいる。

17層の暗灰色粘質土層は層厚30cmで調査区全体にわたって均質に堆積している。若干の植物質を含んでおり、これを基盤にして古墳時代遺物を含む下層流路N R -10が流下している。また18層は多量に植物質を含んでいる。

#### 中世相当面

10層の暗灰色粘土層を基盤とする遺構面である。第1遺構面と同様、遺構は希薄である。この面の上には平均的に中世遺物を含む包含層がみられた。またトレンチ調査部分については、近世の耕作による削平を受けており、中世包含層は確認できなかった。面的な広がりは確認できるものの、明らかに集落の範囲外である。耕作地であった可能性がある。

#### 落ち込みS X-08

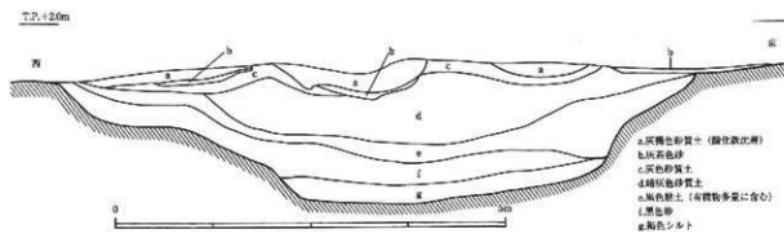
調査区中央部で検出された細長い落ち込み状遺構である。幅60cm、検出長2m、深さ10cmである。埋土は褐色砂質土層である。

#### 自然流路N R -09

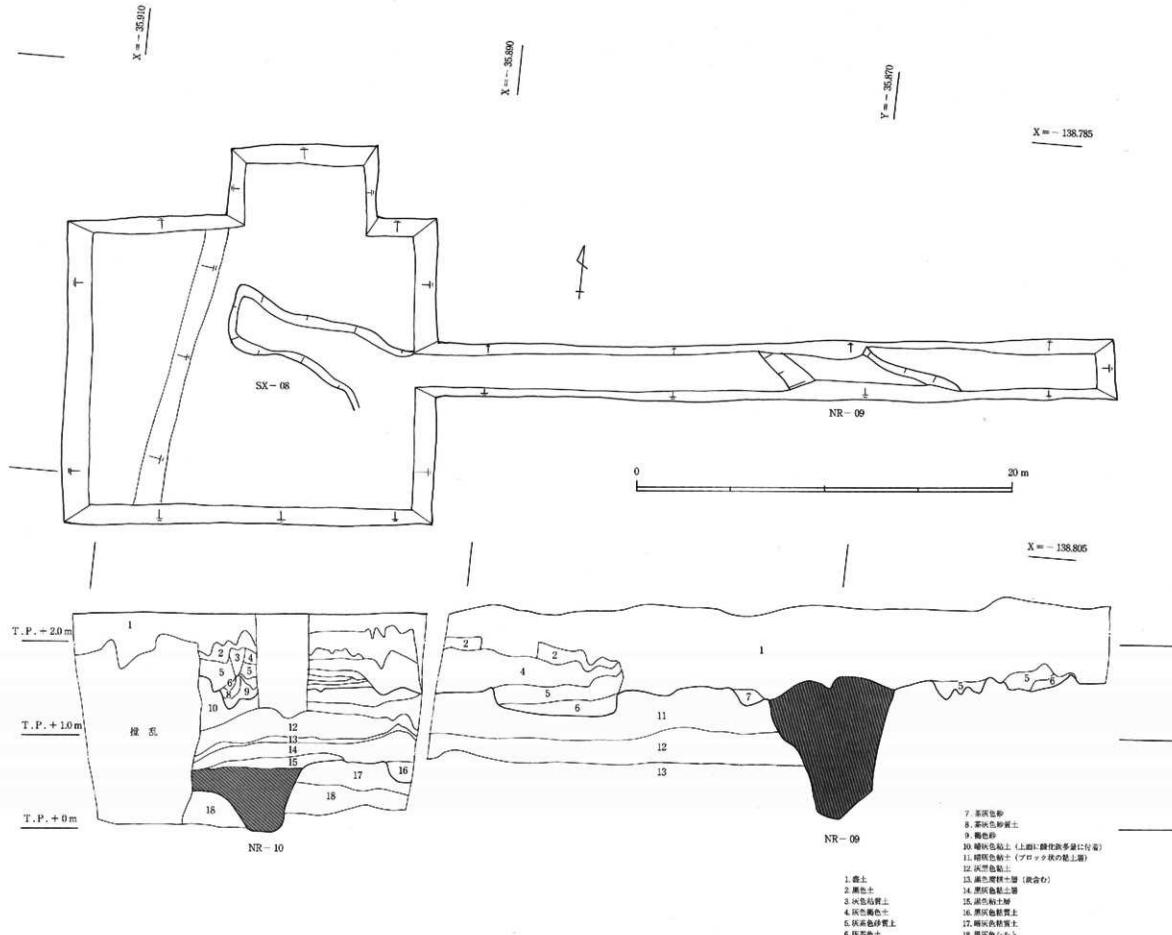
1-3～J-3区にかけて検出された自然流路である。西北から南西に流下する自然河川で、幅約7m、深さ1、4mをはかる。暗灰色や灰色系統の砂や砂質土が主体で、間に黒色粘土もはさんでいる。その中で黒色粘土には草本系の植物遺体が多量に含まれていた。人工の遺物としては少ないながら土師質羽釜、瓦器碗、土師器皿等が出土した。

#### N R -09出土遺物（第7図 1～7）

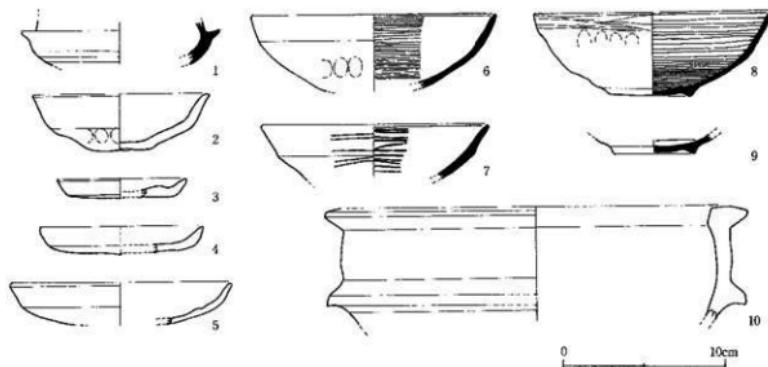
1は細片ながら古墳時代の須恵器杯身である。上流からの流れ込みであろう。2～5は土師皿である。2は復元口径10、9cm、残存高3、4cmである。底部は若干窪んでおり、外反気味に立



第5図 自然流路N R -09土層断面図



第6図 遺構配置図・土層断面図（縮尺 水平：1/200 垂直：1/40）



第7図 中世遺構、包含層出土遺物実測図 1~7 : SD-09 8~10 : 中世包含層

ち上がる。外面下部には指圧痕が残る。3、4は平坦な底部でから口縁が短く立ち上がる。復元口径は3が8、0cm、4は10cmである。5は口径がやや大きなもので13、6cm（復元）をはかる。やや丸みの底部から外反気味に口縁が立ち上がる。6、7は瓦器椀である。6は復元口径15cm、残存高4、5cmである。内面には密にミガキを施すが、外面は上部1、5cm程度にナデが施されるのみでミガキはみられない。7は復元口径14cm、残存高3、2cmである。内外面ともミガキは粗で、体部はやや内湾しながら立ち上がる。

#### 中世包含層（7～9層）出土遺物（第7図 8～10）

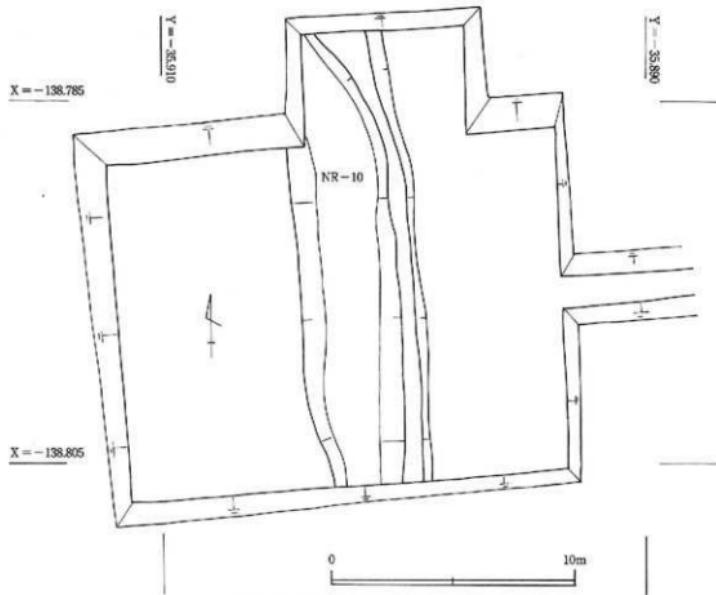
瓦器椀、土師皿、上師質羽釜を主体にしながら、中国製青磁なども出土する。しかしながら図化できるのはわずかであった。8は唯一完形で出土した瓦器椀である。口径14、7cm、器高5、2cmである。断面三角形の高台にゆるやかに外反する体部がつく。内面は丁寧にミガキを施す。しかし外面は上1cm程度でミガキを施すのみである。9は断面三角形状の瓦器椀高台部分である。

#### 下層流路について

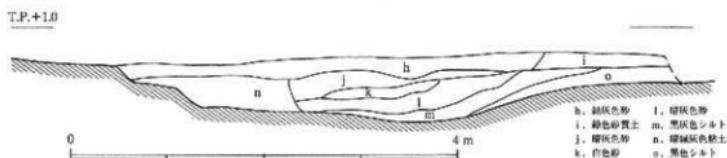
17層の暗灰色粘質土層を基盤とする面である。ここも湿地と思われる軟質の粘土上の堆積であり、特別な遺構は検出できなかった。しかしながら、一定の面をなしており、若干ながらも遺物を含む自然流路NR-10を検出できた。

#### 自然流路NR-10

北から南に流下する流路で、深さは60cm、幅は6m以上である。調査区の北端では直角近くに曲がるような状況で検出できた。おそらく元々の流路は蛇行しながら流れ、調査区範囲内には西から取り付き、調査区内で南に向きをかえるのである。埋土は砂と粘土が互層になっており、遺物は流路の底から発見された。



第8図 下層自然流路検出面 平面図



第9図 自然流路NR-10土層断面図

#### NR-10出土遺物（第10図 11～12）

少量であるが、須恵器と土師器が出土している。11は須恵器高杯の脚部である。12は土師器甕で、口径15cm、体部外側上部に刷毛目を残している。

#### 15層（黒色粘土層）出土遺物（第10図 13～14）

15層にあたる黒色粘土層には若干ながら、須恵器を主体とする古墳時代遺物が含まれていた。13は須恵器の杯蓋で、口径17cm、丸みのある天井部であり、天井付近にわずかに回転ヘラ削りを施している。14は須恵器杯身で、口径11.0cm、やや内湾気味にたちあがる口縁で、底部から1／3程度のところまでヘラ削りを施している。

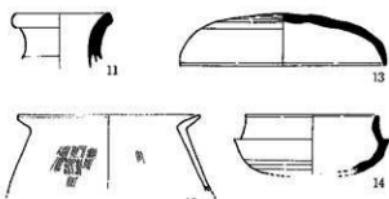
## 第4章　まとめ

今回の調査では古墳時代の遺物を含む自然流路と、13世紀を主体とする遺物包含層、自然流路を検出できた。

下層で検出した自然流路N R-10は若干ながら遺物を含んでいる。この河川は現在の古川と同じように、北から南へ流れている。古川に関連する流路であった可能性がある。出土遺物は土師器、須恵器など古墳時代のものばかりである。しかしながら周囲は湿地を想定させるような堆積状況で、生活跡があったとは思えない。北方に当該時期の遺跡があるのであろうか。

上層の鎌倉時代の遺構面については、建物跡、井戸などの明確な遺構は検出できなかった。過去の調査成果をみると、今回の調査区の北側で、同時期の集落および、耕作地が発見されている。今回発見された中世包含層からは、当該時期の遺物が発見されており、中世の耕作地であったようである。また土層の堆積をみても上層は比較的安定した様相をみており、一定、耕作が可能な条件にはあったものと推測される。

また過去に行われた東側の貯水池に伴う調査（第3次調査）でも、屋敷地らしい遺構は発見されていない。屋敷地は1次調査区を中心とする極めて限定された範囲に収まるようだ。微高地の限られたわずかな部分を利用して集落にしている。また今回の調査区からみると、西側は自然堤防上になんらかの関連施設のある可能性はあるが、東側については湿地帯の様相をしめしており、特別な遺構は存在しないものと考えられる。



第10図 下層遺構、包含層出土遺物実測図

11、12: NR-10 13、14: 黒色粘土層

報 告 書 抄 錄

ふりがな	なかかみたいせきはつくつちょうさがいよう
書名	中神田遺跡発掘調査概要・II
副書名	寝屋川御幸西住宅第3期工事に伴う発掘調査
卷次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	横田明
編集機関	大阪府教育委員会
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06-6941-0351
発行年月日	2000年3月

所収遺跡名	所在地	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
なかかみたいせき 中神田遺跡	おおさかふ ねやがわし みゆきにしまち 大阪府 寝屋川市 御幸西町	27215	48	34	135	2000年	460	寝屋川 御幸西住宅 第3期工事
				44	36	1月~3月		
				54	27			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	土な遺物	特記事項
中神田遺跡	集落	古墳時代 鎌倉時代	自然流路	須恵器、 土師器、 瓦器、 土師皿、 青磁碗、 羽釜	

# 図 版



中世相当面西半部（西から）



中世相当面東半部（西から）



中世自然流路 NR-09



中世自然流路 NR-09 断面



調査区北壁上層断面



中世遺物出土状況



下層自然流路 NR-10



下層自然流路 NR-10 断面

中神田遺跡発掘調査概要・II

—寝屋川御幸西住宅第3期工事に伴う発掘調査—

2000年3月

発行 大阪府教育委員会  
〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目  
TEL 06-6941-0351

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所  
〒537-0002 大阪府大阪市東成区深江南2丁目6番8号  
TEL 06-6976-8761

